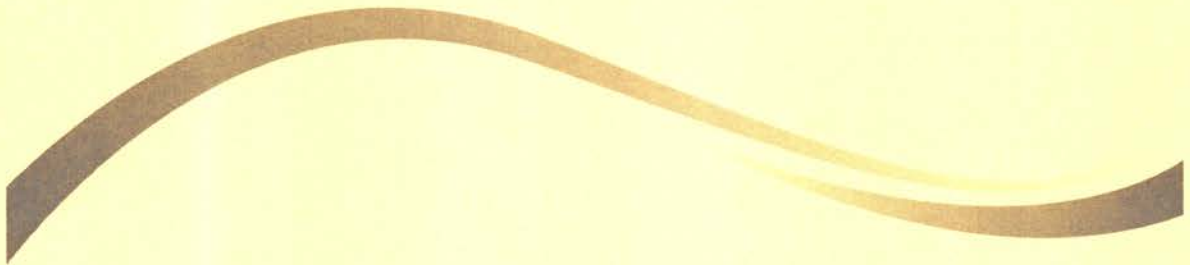


## Ⅱ 「本校における児童生徒一人一人の キャリア発達を捉える視点」に 基づいた事例研究



## Ⅱ 「本校における児童生徒一人一人のキャリア発達を捉える視点」 に基づいた事例研究

1. はじめに	9
2. 事例研究	9
(1) 事例対象生徒の実態	
(2) 実践	
(3) 実践に対する考察	
3. 成果と課題	12

## Ⅱ 「本校における児童生徒一人一人のキャリア発達を捉える視点」に基づいた事例研究

### 1. はじめに

今回の学校研究では、Ⅲ章で詳しく述べるように、キャリア発達支援の視点を取り入れながら、学習活動の充実改善の取り組みを行ってきた。その中で、各実践を実際に行ってどうであったかを評価（「アウトプット評価」<sup>(1)</sup>）しているが、一方で、各実践を通して、児童生徒一人一人にどのような「変化」が起きたかを理解すること（「アウトカム評価」<sup>(1)</sup>）も必要である。

そこで、Ⅰ章で述べた「本校における児童生徒一人一人のキャリア発達を捉えるための視点」に基づいて、事例研究を行った。

#### 「本校における児童生徒一人一人のキャリア発達を捉えるための視点」

- ・「キャリア」は、個人の内面において生まれて、発達し、変化するものであるため、児童生徒の行動の変容とあわせて、「内面」の変化を捉えていく。
- ・児童生徒の「キャリア発達」を促すためには、児童生徒一人一人が「自分が生きる社会をどう捉え、その中で自分をどう捉えているか」を把握し、より現実的なものに修正・更新できるようにしていくことが必要である。その際、教師の役割として、これまで本校で取り組んできた「知識と自己認識を探るための介入」と「知識と自己認識を修正・更新するための介入」を行う。（ここでいう「知識」とは、「社会認識」と同義であると捉えている。）

### 2. 事例研究

今回取り上げたのは、高等部2年の女子生徒の事例である。この事例では、高等部2年の7月に行う「就労アセスメント実習」に関わる一連の取り組みを中心に、事例対象生徒がこれまでの働く体験を通して、どのような知識や自己認識を得ているのかを把握し、より現実に即した知識や自己認識に更新・修正できるように学習活動を行った。（「就労アセスメント実習」については、105～109ページを参照。）

#### （1）事例対象生徒の実態

事例対象生徒は、高等部2年のG子である。（105ページからの高等部1・2年「就労アセスメント実習」の試みで出てくるG子と同じ生徒である。）G子の実態は、次のとおりである。

- ・本校には、中学部から在籍している。
- ・働くことに興味を持っている。
- ・近所に住む本校の卒業生や自分の兄弟が働いている姿を見て、学校を卒業したら、自分も働くのだろうと思っている。
- ・言語での表出に困難さがあり、自分の思いを十分に表すことが難しい。
- ・面識のない人に話しかけるのは苦手で、かなり親しくしないと、自分から話しかけることはない。

## (2) 実践

### ① 個別の指導計画作成に関わる聞き取り・アンケート

本校では、個別の指導計画作成にあたって、4月に保護者を対象としたアンケートと懇談を行っている。また、児童生徒の思いを推察するために、行動観察や個別での聞き取り等を行っている。

G子への聞き取りでは、得意な仕事・好きな仕事は「お菓子をつくる」こと、苦手な仕事は「ない」と答えていた。また、G子の保護者へのアンケートには、進路に関する事柄について、「過去に職場実習に行った所はけっこう気に入っているみたいなので、その流れで就労できればいいのかなと思う」と書いてあった。担任は、本人と保護者の発言から「一般就労希望で、食品関係の仕事を希望している」と受け取った。

5月12日の進路学習では、これまでに体験した働く体験（現場実習・作業学習）について、写真や動画を見ながら振り返る学習活動を行った。生徒に問いかけると、ほとんどの生徒が過去に体験した実習先を正確に答えていた。また、写真や動画を提示すると、その時の仕事の様子を話していた。G子も写真や動画を見ながら、実習での仕事内容を話していた。ワークシートには、教師と一緒に確認をしたり板書を写したりしながら、今までに体験した作業内容を書いていた。「これまでに体験した実習先の中で、自分に一番合っていると思う実習先はどこですか」という問いには、高1で現場実習を行った和菓子店の名前を自分で書いていた。

この学習活動を通して、担任は、G子の場合は、これまで作業学習でも現場実習でも食品製造の仕事を体験することがほとんどであったことが分かった。食品製造の仕事の体験がほとんどで、他の業種をほとんど経験していないため、「得意な仕事・好きな仕事は『お菓子をつくる』、苦手な仕事は『ない』」という答えになったのではないかと推察した。そのため、G子には、他の業種も体験する場を設定することが必要ではないかと考えた。

表Ⅱ－１ 個別の指導計画作成に関わる聞き取り・アンケート等の日程

月日	生徒	保護者
4月14日(月)		個別の指導計画作成のためのアンケート
4月23日(水)		個別の指導計画についての保護者懇談 (アンケートの内容について)
5月9日(金)	個別の指導計画作成のための聞き取り(個別)	
5月12日(月)	進路学習「これまでの働く体験について」	
5月28日(水)		個別の指導計画についての保護者懇談 (個別の指導計画を保護者に提示)

### ② 「就労アセスメント実習」に関わる一連の取り組み

今年度の文部科学省委託事業で本校が取り組む内容の一つとして、「就労移行支援事業所と連携した就労アセスメント実習及び事後のケース会議」の取り組みがある。今年度は、高等部2年前期と1年後期で実施することにした。そのため、G子を含め、高等部2年の生徒（一般就労の可能性のある生徒）は、高等部2年前期の現場実習期間に「就労アセスメント実習」を行う。

「就労アセスメント実習」（就労移行支援事業所内で行う実習）の概要は、105ページのとおりで

表Ⅱ－２ 「就労アセスメント実習」に関わる一連の取り組みの日程

	生徒	保護者
5月27日(火)	就労移行支援事業所の見学	
6月2日(月)	進路学習「実習先の見学の振り返り」	
6月27日(金)	実習先での報告の仕方について(個別)	
6月30日(月) ～7月2日(水)	就労移行支援事業所での就労アセスメント実習	初日挨拶
7月3日(木)	学校での振り返り 就労移行支援事業所でのケース会議	
7月7日(月)	進路学習「就労アセスメント実習を振り返って」	
7月8日(火)	現場実習報告会	
7月10日(木)	個別懇談	
7月14日(月)	進路学習「仕事をする時のルールとマナー」	
7月16日(水)		保護者懇談

ある。

#### ア. 「就労アセスメント実習」での様子

「就労アセスメント実習」の中で、G子は、出勤時に普段よりもはっきりとした声で挨拶をしたり、作業後の報告の際に、手元のメモを見て確認したりしており、事前に教師から伝えられていた職場のルールやマナーを守ろうと意識して取り組んでいる様子が見られた。一方で、就労移行支援事業所が企業から依頼されている、しおりを折る仕事(短冊状の紙を3つ折りにする仕事)をしていた時には、うまく折ることができず、紙を何度も折ったり、端を触ったりして、就労移行支援事業所の支援員の方に自分から尋ねることができなかった。また、支援員の方から「イライラしますか」「作業を変えますか」と声をかけられたが、黙っていた。これらの様子から、G子は、仕事のやり方が十分に分からない時やうまくいかない時に、自分から尋ねることができず、つまずきやすいのではないかと思われた。

#### イ. 「就労アセスメント実習」後の振り返り

「就労アセスメント実習」の翌日には、校内での個別懇談と就労移行支援事業所でのケース会議を行った。個別懇談とケース会議では、生徒に対していくつかの質問を行った。7月7日(月)には、進路学習で実習の振り返りを行った。教師は、ワークシートを配布し、その項目に沿って、写真や動画を見ながら、生徒に1人ずつ尋ねた。

G子は、進路学習の中で「実際に仕事をしてどうでしたか」という質問に、「Tシャツをたたむのが難しかった。」「板があると、たたみやすかった。」と教師とのやりとりの中で答えていた。「同じ実習先でまた仕事をしたいですか」の質問には、4つの選択肢の中から「とてもしたい」を選んでいて、今回就労アセスメント実習を行った生徒4名の中で、G子だけが「とてもしたい」を選んでいて、また、「ビジネスマナーがおもしろかった。」「(他の利用者の方がしていた)ピッキングをしてみたい。」と、教師とのやりとりの中で答えていた。また、個別懇談の際に、「(軽作業やパソコン入力などをしたが、)次の現場実習では、食べ物をつくる仕事以外でもよいか」と尋ねると、「いい」「(できれば)食べ物の仕事がいい」という旨を伝えていた。しおり折りの作業について、G子にいろいろな尋ね方をしたが、質問に対してわずかに頷くだけで、本人からの発言は

なかった。

#### ウ. 「就労アセスメント実習」後の保護者懇談

7月16日(水)に行った「就労アセスメント実習」後の保護者懇談で、G子の父親に、しおり折りでの様子を伝えると、「実際に働き始めてから同様の場面があった時に、例えばパートのこわいおばさんに強く言われると、その場で固まってしまうと思う。帰宅後、本人は『(仕事を)辞める』と言って、次の日から仕事に行かなくなるかもしれない。」「本人は、中3で体験した『おでんの調理補助』(就労継続支援A型事業所)の時に『楽しかった』と言っていたが、仕事の内容もそうだが、実習先での対人関係がよかったようである」という旨のことを話されていた。この懇談で、担任とG子の父親との間で、「G子には、職場での対人関係に配慮が必要である」「業種の希望は、食品関係とは限らない」ということを確認した。

#### エ. 過去の現場実習の記録から

7月16日(水)の保護者懇談で話し合われた内容を確認するために、G子にとって好印象だったと思われる中学部3年と高等部1年での現場実習の様子を確認することにした。その際には、手元に残っている資料や当時の引率教員からの聞き取りをもとにした。

中学部3年での職場体験では、実習先で働く方々からたくさん声をかけられて、笑顔で応えていた。そのことが本人にとっては「楽しい」という感想につながっていたようである。

高等部1年での現場実習のお礼状には、次のように書かれていた。

「お菓子づくりをおしえてくれて、ありがとうございました。おべんとういっしょに食べました。テレビいっしょに見たね。また〇〇〇(実習先の和菓子店の名前)へ行きたいです。ありがとうございました。」

G子は、和菓子の箱詰め等の仕事に黙々と取り組んでいたが、それ以上にG子にとっては、休憩時間に職場の方々と一緒に過ごしたことが印象に残ったようである。

また、高等部2年での就労アセスメント実習後に、就労移行支援事業所からいただいた記録には、「(グループワークの)振り返りでは、『楽しかった』とあり、『黙っているのは辛いですか』と聞くと、頷いていた。」と書かれていた。このことから、G子にとっては休憩時間等に職場の方々と一緒に会話をする機会が必要なようである。

#### (3) 実践に対する考察

この実践では、高等部2年の7月に行った「就労アセスメント実習」でのG子の様子をもとに、G子本人や保護者、過去に担任した教師からの聞き取りを行うことで、中学部3年での就業体験や高等部1年での現場実習でのG子の様子や発言ともつなぎ合わせて、一つのまとまりとして捉えることができた。そのことによって、G子が将来働く生活を送るうえでは、職場での対人関係が重要になってくることが推測された。

一方、この実践では、先に挙げた教師の役割のうち、「知識と自己認識を探るための介入」を多く行えた反面、「知識と自己認識を修正・更新するための介入」が十分に行えなかった。

#### 3. 成果と課題

この章では、「本校における児童生徒一人一人のキャリア発達を捉える視点」に基づいてG子の事例を検討してきた。この事例研究で行ったことは、「キャリア発達に向き合う時の私たちの姿勢として重要な」<sup>(2)</sup>、児童生徒の「経験や学びの背景に関心を持って、新しい学びを支援しよう」と<sup>(2)</sup>することにもつながると考えられた。

事例研究で行った内容は、必ずしもすべての児童生徒に対して同じように行えるとは限らない。

個別での取り組みに加え、各教科・領域等の授業においてどのように具現化していくのかが課題である。

※この事例研究では、吉川一義氏（金沢大学人間社会研究域学校教育系教授）に助言をいただいた。

#### 引用文献

- (1) 木村宣孝（2013）「キャリア教育の『評価』をどう捉えるか」．菊地一文編著「実践キャリア教育の教科書」学研教育出版
- (2) 木村宣孝（2013）「特別支援学校知的障がい教育校におけるキャリア発達の支援について」．第48回全国特別支援学校知的障害教育教頭研究大会北海道大会 特別講演記録

#### 参考文献

- 1．吉川一義（2011）平成22年度本校教育研究会 シンポジウムにおける発表資料
- 2．吉川一義（2014）平成26年度本校研究フォーラム パネルディスカッションにおける発表資料